「Death Education」に関する研究

分担研究者　西村昂三

「総括報告書」

Death Education に関する研究を

(1)ターミナル・ケア向上のための方策は？

(2)臨死患児の心理的特徴は？

(3)予後不良患児の疾病教育および健常児に対する死の教育のあり方は？

の三つのリサーチ・クエスチョンを設定して研究を行った。

1．ターミナル・ケア向上のため、入院中の患児の学校教育、年長児の問題点、身体的障害を伴う患児のケアについて研究と共に、こどもの死を経験した親へのアンケート調査を行った。

院内の学校教育は患児・家族のＱＯＬの向上に役立ち、年長児では死に対する認識がより明瞭になり不安が増大するが、それを口に出して言わない傾向が強くみられた。

アンケート調査では子ども自身が病名や自分の死を知っていたとの返答が意外に多く、在宅ケア、在宅死を望む声が強く、海外のMcDonald House や Children's Inn のような宿泊施設の設置を望む声も強かった。

また、カウンセラーや臨床心理士の必要性を訴える声も多くみられ、その必要性が痛感された。

2．ターミナル・ケアを行った患児の家族について心理面接を行ったところ、死の受容はそれぞれの家庭により異なるので、その家庭に応じた親と子の信頼関係を継続させることが重要で、ターミナル期でも患児は親への思いやりを失っていなかった。

また、ケアは初診時から配慮が大切で、患児家族、医療者３者の信頼関係の確立と継続が望まれた。

3．小学生、中学生、高校生を対象とした死に関する意識調査、学校教員に対する「死の教育」に対する現状の意識調査、こどものデス・エデュケーションに関する有識者調査を行った。

小児は死に対し外部から襲ってくる破壊的イメージは「生の大切さの教育」であった。

教師に対し「死の教育」研修の必要性が感じられた。

これらの研究結果を活用して、予後不良患児に対する疾病教育には両親の教育用に「この子のためにやれること」── ターミナルのお子さんをおもちのご両親のために ── と題したパンフレットを作成した。

また研究結果から、(1)小児のターミナル・ケアを担当する医療チームにケース・ワーカー（カウンセリング）・心理士の参加の促進、(2)在宅ターミナル・ケアの普及のため訪問看護婦制度の充実とともに専門医の往診体制の確立、(3)入院では親子の絆が切られることが多いので、親子が共に泊まれる宿泊施設の設置の促進、(4)院内学級の設置の普及、(5)死についての学校教育や社会教育の普遍化が必要と思われた。

今後の課題として

1．医療者むけの「こどもの死」「予後不良患児に対する疾病教育」「ターミナル・ケア」に関する指針（パンフレット）の作成。

2．こどもの死についての社会啓蒙と一般むけパンフレットの作成。

3．小児の在宅ターミナル・ケアのできる訪問看護婦の養成。

4．予後不良患児に対するデス・エデュケーションおよび健常児に対する死についての教育の普及。

5．親子の宿泊施設の設置に公営住宅の活用。

以上５項目に取り組まなければならないと考えられた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Death Educationに関する研究を
(1)ターミナル・ケア向上のための方策は?
(2)臨死患児の心理的特徴は?
(3)予後不良患児の疾病教育および健常児に対する死の教育のあり方は?
の三つのリサーチ・クエスチョンを設定して研究を行った。
1.ターミナル・ケア向上のため、入院中の患児の学校教育、年長児の問題点、身体的障害を伴う患児のケアについて研究と共に、こどもの死を経験した親へのアンケート調査を行った。
院内の学校教育は患児・家族のQOLの向上に役立ち、年長児では死に対する認識がより明瞭になり不安が増大するが、それを口に出して言わない傾向が強くみられた。
アンケート調査では子ども自身が病名や自分の死を知っていたとの返答が意外に多く、在宅ケア、在宅死を望む声が強く、海外のMcDonald HouseやChildren's Innのような宿泊施設の設置を望む声も強かった。
また、カウンセラーや臨床心理士の必要性を訴える声も多くみられ、その必要性が痛感された。
2.ターミナル・ケアを行った患児の家族について心理面接を行ったところ、死の受容はそれぞれの家庭により異なるので、その家庭に応じた親と子の信頼関係を継続させることが重要で、ターミナル期でも患児は親への思いやりを失っていなかった。
また、ケアは初診時から配慮が大切で、患児家族、医療者3者の信頼関係の確立と継続が望まれた。
3.小学生、中学生、高校生を対象とした死に関する意識調査、学校教員に対する「死の教育」に対する現状の意識調査、こどものデス・エデュケーションに関する有識者調査を行った。
小児は死に対し外部から襲ってくる破壊的イメージは「生の大切さの教育」であった。
教師に対し「死の教育」研修の必要性が感じられた。
これらの研究結果を活用して、予後不良患児に対する疾病教育には両親の教育用に「この子のためにやれること」－ターミナルのお子さんをおもちのご両親のために－と題したパンフレットを作成した。
また研究結果から、(1)小児のターミナル・ケアを担当する医療チームにケース・ワーカー(カウンセリング)・心理士の参加の促進、(2)在宅ターミナル・ケアの普及のため訪問看護婦制度の充実とともに専門医の往診体制の確立、(3)入院では親子の絆が切られることが多いので、親子が共に泊まれる宿泊施設の設置の促進、(4)院内学級の設置の普及、(5)死についての学校教育や社会教育の普遍化が必要と思われた。